

まず、阿蘇の草原に関する科学的データの収集・整理から始めます。

自然環境、社会環境の両面から草原に関する情報を収集し、誰もがそれを利用できるようにデータベース化するための検討を進めています。

阿蘇郡全域の草原・樹林地の分布、希少野生動植物の分布状況について、これまで蓄積されたデータに加え、衛星画像を使って分析を行います。草原については採草地や放牧地など利用タイプ別の分布の把握を目指しており、九州東海大学をはじめ大学や試験研究機関との協働により進めています。

また、社会環境情報として、アンケートやヒアリング

により牧野組合による草原の維持管理状況などについて調査を進め、自然環境情報と合わせて、阿蘇全体の草原の現状を分析・評価します。



＊平成15年牧野組合調査＊

阿蘇郡内の全牧野組合（181組合）を対象に、平成10年阿蘇グリーンストックが行ったアンケート調査データの更新に加え、草原維持管理の実態と意向を把握するため、阿蘇地域振興局も参加して調査票を作成。現場は地元NGOである阿蘇グリーンストックが担当し、町村担当者の協力も得て、調査を実施しています。集計後は各都議会ごとに分析をして計画に反映させていきます。

POINT

1

宇宙から阿蘇をみてみよう

衛星画像により阿蘇の草原の状況を調査

人工衛星を使って地球を観測する技術（リモートセンシング）は、宇宙から撮影した写真を使って、地上にある建物、森林や草原などの分布を把握するものです。一度に広い範囲を撮影し、短期間に地域全体を観測できますので、広大な阿蘇の草原の観測、現状分析に向いています。例えば、LANDSAT（ランドサット）という衛星では、一枚の写真で阿蘇郡全域がすっぽり入ってしまいます。

年次の違う画像からその間の変化を見ることも可能であり、現に89年と97年の画像を比べ、野焼きの範囲が狭くなっていることも突き止めました。また、既存の牧野組合の地図と衛星画像を重ねて表示して、分析に使うことができます。

阿蘇草原再生では、このリモートセンシング技術を使って、阿蘇郡全域の草原、樹林地の分布や、野焼き面積などを、年代ごとに分析することで、草原の移り変わりを示すことができないか検討しています。



- 森林**
 - スギ、ヒノキ樹林地
 - 常緑広葉樹林地
 - 落葉広葉樹林地
 - 雑草広葉樹林地
 - 草原**
 - 火入れの少ない草原
 - 火入れの多い草原
 - 火入れの少ない半自然草原
 - 火入れの多い半自然草原
 - 採草地
 - 放牧地
 - 荒原**
 - 火山噴出
- R B6
G B5
B B4

ランドサットデータ(1997/4/1)で診た阿蘇の植生
野焼き直後の画像なので、野焼きした領域（火入れされた領域：濃い茶色）と野焼きしていない野草地（長草型半自然草原：薄い茶色）が鮮明に識別できる。また、短草型草原（クリーム色：ほぼ中央の草千里ヶ浜など）の識別も明瞭である。（画像処理：九州東海大学、筑波英行委員の解説より）

インタビュー 草原を守る人々



井 信行氏

産山村在住、産山村上田尻牧野組合前組合長、さわやかビーフ生産組合組合員、阿蘇フォーラム委員長、阿蘇草原再生「情報発信-合衆形成に関する検討部会」委員

BSE問題などもあって食品の安心・安全が見直されつつあります。4人の勇士（有志）で立ち上げた「さわやかビーフ生産組合」は地域内一貫生産、間違いなく私たちの顔が消費者に見えるんです。今は、生産が追いつかないほど売れ行きが好調です。

畜産ががんばらなければ、阿蘇の草原も守れなくなります。あか牛があと5千頭増

えて1万5千頭になれば、草原は自然体で守られる。そう思っています。

いま、一番の夢は、阿蘇の人たちが元気になること。そのために「さわやかビーフ」や、無農薬野菜や農産加工品などを集めた生産者直営の共同店舗「かたらんね」での販売をもっと広げて、都会の人に阿蘇の魅力を伝えていかなければと思っています。

POINT

2

モーモー輪地切り実施地などで 植生調査を実施しました

輪地切り省力化技術の確立・普及に向けて取り組んできたモーモー輪地切りや牧野内の小規模点在樹林地除去実施地及び、長年管理放棄された牧野、計4牧野において、それぞれが植生に及ぼす効果を測定するため植生調査を実施しました。調査は、昨年10月末に九州沖縄農業研究センターの協力により進めており、地上部刈り取りによる植生調査の他、表層土壌の硬度測定、埋土種子群の調査も行っています。その結果、モーモー輪地切りを行った場所では、確実に草量が減少している、その効果が実証されました。また、管理放棄されていた牧野では、枯れた植物が大量に堆積していることが確認され、野焼き再開に向けた貴重なデータが得られました。



10年以上野焼きされていない日の尾牧野での調査

調査は来年度以降も続け、変化をモニタリングしていきます。

POINT

3

輪地切り省力化に向けた 事業実施地などを視察しました

去る12月12日、「草原管理手法に関する検討部会」「草原維持活動支援システムに関する検討部会」委員が合同で草原景観維持事業（グリーンワーカー事業）実施地などの現地視察を行いました。雪がちらつくなか4箇所の牧野をまわり、牧野組合長からも事業の効果や今後の展開などについて説明を受けました。



第1回合同検討部会視察地
阿蘇部内の牧野組合管理区
域図に視察地を示したもの

野焼きを再開できてよかった

山田東部牧野組合児玉清士組合長

除去した森林は牛の避難林として植えたもの。ここ10年位は周辺の野焼きが出来ない状況になり、荒れた状態だった。樹林地除去により、約6haで野焼きを再開することができて喜んでいる。



モーモー輪地切りの効果が出てきた

木落牧野組合園田高組合長

モーモー輪地切りを本格的に始めて3年目、ご覧のとおり立派な輪地ができ、野焼きの時の消火作業も安全に行えるようになった。牛は獲せることなく健康であった。電線の張り方などの工夫によりもっと効率的に行えると思う。



インタビュー 草原再生への期待



瀬井純雄氏

白水村在住、平成8～13年産山村立産山中学校教諭、現在白水村立中松小学校教頭、阿蘇草原再生「草原管理手法に関する検討部会」委員

私は波野、高森あたりの草原風景を通勤途上で6年間毎日見してきました。また、最近3年間にわたり阿蘇の東部地域の草原を歩いて調査してきましたが、ここ10年位で放置された原野が非常に増えてきています。実際、草原に入って驚くことは、数化して花がなくなっているということです。一の宮や産山など組合単位で管理されている地

域では放棄されるケースは少ないのですが、いったん放棄されると非常に大きな面積に影響が及びます。一方、個人所有の草原が多い波野や高森では連続して小面積の放棄が続き、草原再生は待ったなしの状況です。こうした状況も具体的に把握し、阿蘇独自の草原生態系を回復していく取り組みが進むことを期待しています。